


# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員 (主査) 澤田 ゆかり 

学位申請者 朴紅蓮

論文名 現代中国の市場経済と「良き母親」言説の再編  
—都市部で働く「80後」の高学歴女性を中心に

## 【審査結果】

提出された学位請求論文は、中国都市部で働く「<sup>バーリンホウ</sup>80後」の高学歴女性に焦点を当て、市場経済期に再編されつつある「良き母親（好媽媽）」言説の根本には、社会主義市場経済と家父長制の相互作用と変容がある点を明らかにしたものである。本論文は、ジェンダーの視点だけでなく、中国ではまだ本格的に応用されていないマルクス主義フェミニズムの理論を使って、市場経済の下での新たな家父長制と「良き母親」言説の再編過程について、文献調査、統計データ分析、インタビュー調査の研究方法を使用し、マクロ、メゾ、ミクロレベルから実証的に解明しており、論旨も明快で、その学術的貢献は高く評価できる。とりわけ、フィールドワークの対象である天津において、中国人である利点を活かしたインタビューや天津ママネット（web サイト）の分析を通じて、中国人女性個々の声を具体的に拾い出したことは、市場経済期に「良き母親」言説が再編されたという命題に説得力を与えており、国際的にも先端に位置する研究であると言える。また、最終試験における審査委員との質疑応答からも、朴紅蓮氏が研究テーマに関する幅広い知識と深い理解を有し、今後の研究に対して明確な展望と方向性をもっていることを十分にうかがわせた。

審査委員会は、澤田を主査として、本学の金富子教授、野本京子教授、中野敏男教授、外部から石川照子教授（大妻女子大学。中国近現代史、ジェンダー史）の5名から構成され、2016年1月25日に公開審査（最終試験）を開催した。論文審査と最終試験の結果により、審査委員会は全員一致で朴紅蓮氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。

## 【論文の概要】

提出された学位請求論文は、序章、終章のほか、第1部（第1章・第2章・第3章）、

第2部（第4章・第5章・第6章）からなっている。本論文の概要は以下の通りである。

序章ではまず、本研究の問題意識を提起し、性別役割分業、母親と育児、「80後」に関する先行研究を検討した。次に、マルクス主義フェミニズム理論の中国社会への応用可能性について考察した。

第1部では、計画経済期に構築された「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が市場経済期に「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」と変化しつつある点についてマクロレベルから、以下のように考察した。

第1章では、統計データを用いて、労働力率・就業率、雇用形態、性別賃金格差、職業構造という側面から市場経済期に中国女性の労働環境が厳しくなった点、また、市場経済期に女性の育児負担が加重化した点を実証的に明らかにした。

第2章では、国家の政策に関する分析を通じて計画経済期に構築された「男性は仕事、女性は仕事と家庭」という性別役割分業が市場化の中で「男性はより仕事へ、女性はより家庭へ」と変容しつつある点、市場化の中で企業社会は男性労働力を中心にジェンダー化され、女性は労働市場から家庭へプッシュされている点を明らかにした。

第3章では、市場化の中で女性はなぜより家庭へと移行するのかを、国家の育児および子どもの教育関連の政策を通じて考察した。市場化の中で育児が家庭へと私事化し、国家は「一人っ子政策」と素質教育を通じて質の高い人材を育成しようとするが、子どもの質への要求の高まりは結局母親の育児責任と負担を加重化したことがわかった。

第2部では、天津市に焦点を当てて、天津市の婦女連合会(以下では「婦女連」とする)の「母親教育プロジェクト」というメゾレベル、女性個人というミクロレベルから「良き母親」言説がどのように再編され、女性個人がその再編とどのようなかわりを持つかを以下のように分析した。

第4章では、「母親教育プロジェクト」に関する分析を通して、婦女連が提唱する「良き母親」とは、すなわち自己犠牲的で社会奉仕的な、仕事・子どもの教育・他の家庭のことをすべて上手く行う「スーパーマザー」型の母親である点を明らかにした。

第5章では、専業ママに焦点を当てて、「80後」の母親たちが「良き母親」言説をどのように受け入れているのかを考察した。「80後」の母親たちが考えている「良き母親」とは子どものために自分ができるすべてを行う、自己犠牲的で辛抱強い母親である。心身とも優秀な子どもを育てるために母乳育児を行い、早期教育を熱心に行うことから、母親たちが「良き母親」言説を内面化し、その再編に積極的に参加していることが分かる。しかし、専業ママになれる者は経済的、人的資源に恵まれている一部の者に限られている。

第6章では、天津で働く「80後」の高学歴女性とその夫へのインタビュー調査を通じて、「良き母親」言説の根底に家父長制がある点を考察した。母親たちは「小さな店の夢」を持っているが、それは子どもおよび家族のために母親が仕事を調整することを意味して

いた。夫(父親)ではなく、母親が仕事を調整する根底には育児を女性の責任とし、女性に家庭内の無償労働を担わせる家父長制があった。

終章では各章の内容を総括し、本研究の意義と今後の課題を明らかにしていた。

#### 【公開審査(最終試験)の概要】

公開審査(最終試験)は、2016年1月25日(月)14:00~16:00に東京外国語大学本部管理棟2階中会議室において行われた。最初に朴紅蓮氏より提出論文の概要と意義について説明があり、その後、各審査委員が講評とともに活発な質疑を行った。最後に、朴紅蓮氏より、質疑応答の内容をふまえて、今後の研究の課題と方向性が述べられた。

#### 【論文審査および最終試験の結果】

提出論文について、審査委員から高く評価されたのは以下の諸点である。

(1) 中国における市場経済への転換が女性の労働にどのような変化をもたらしたのかを問い、それが「男性をより仕事へ、女性はより家庭へ」という形で、女性を労働市場から家庭・育児へと導いている過程と要因を見事に記述し分析している。その考察は、中国における注目すべき変化である市場化が人々の生活にもたらす影響を具体的な場面で捉えていて非常にシャープであると評価された。

(2) とりわけ、計画経済期に公的保育施設を通じて国家が担ってきた育児が、市場経済期になると国家の育児および教育関連の政策を通じて育児の私事化が進んだこと、さらに国家が「一人っ子政策」と素質教育を通じて質の高い人材を育成しようとしたが、子どもの質への要求の高まりが結局は母親の育児責任と負担を加重化したことを実証的に明らかにした点は説得的であった。

(3) また、そのプロセスが「良き母親」言説という本質主義的な母性主義のイデオロギー形成を伴って展開している事実を、「天津ママネット」という育児webサイトに参与して突き止めるという手法は興味深いとされた。また当事者のインタビューも丁寧に実施して描き出していて、読み物としても面白い論説になっている。実施されたインタビューのサンプル数は多いものではないが、このテーマでの初めての試みという点では、十分に意義のあるものになっている。

一方、審査委員からは以下のような疑問点・改善すべき点が指摘された。

(1) 家父長制という用語の使い方について、具体的な分析概念ではなく、単に「女性が家事を引き受けること」を示すだけではないか、家父長制を全体にどう位置づけるのか必ずしも明確ではない。

(2) 「天津ママネット」の分析は都市部が対象だが、どの程度の普遍性があるのか。性別役割分担は男性をも拘束しており、父の不在をどう考えるのか。東アジアの女性就労は、

日本・韓国はM字型、中国は変形台形だが、女性のライフスタイルから生ずる祖父母-父母世代の育児をめぐる葛藤は意識面だけではなく、どのような社会的条件をもっているのか。日本以上に結婚・出産の圧力が強いなかで、個人の選択可能性をどう考えるのか。

これらの疑問点に関して、最終試験における朴紅蓮氏はこれらの問題点は十分に自覚しており、的確な応答がなされた。また、審査委員も上述の問題点が本論文の学術的な価値を損なうものではないという点で意見の一致をみた。その上で、審査委員は全員一致で、本論文は博士の学位にふさわしい貴重な成果であると判断した。

以上、論文審査と最終試験の結果により、審査委員会は全員一致で朴紅蓮氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。